

「私たちの旅は、いま、はじまったばかりのところなのだ」
—わたしにとっての吉行淳之介、そして彼の小説への招待—

吉行淳之介といえば、夜の世界の酸いも甘いも噛み分け、女にも男にもとにかくモテた文壇随一のダンディ。没後、事実上の妻であった宮城まり子をはじめ、何人もの女性が吉行との秘話を綴り、タモリ、井上陽水といった文化人までもが彼との思い出をエッセイにしたためた。誰もが吉行のやさしさ、ダンディズムに魅了され、ある時代の文壇の中心であったことは野坂昭如著「文壇」に詳しい。

一方で、ほんとうはむずかしいひと、という評もあり、ごく親しい友人、編集者にはそのような姿も見せたようであるが、生前、没後とも語られることは少なかった。

性を題材に、男女の深淵を描いた吉行淳之介。都会的に洗練されたたたずまい、華麗な交流関係、なにより対象の本質を捉える視線はときに同業者から恐れられ、村上春樹は「やはりなんといっても恐れ多い」と氏らしい表現で伝えるが、「驟雨」で第三十一回芥川賞を受賞してから4年、当時34歳の吉行が記した2篇の短編「寝台の船」、「鳥獣虫魚」は文壇随一の色男が50年以上前に書いたとはおもえないほど、みずみずしく、あたたかな潤いに満ち溢れ、読者の胸に迫る。

「寝台の船」の主人公は、女学校の教師をしてかろうじて生計を立てている若い男である。

物語は彼が精根尽きかけていたある日、街の古本屋で一冊の西洋の童話集を求めるところからはじまる。

ある夜、主人公は寝床で何気なく童話集を開き、「寝台の船」という童謡に目をとめる。「夜っぴて闇を漕ぎまわり／いつか明るい朝になりゃ／馴れたお部屋の棧橋に／寝台の船はもとどおり」

童謡の一節とともに、場面はカーテンの隙間から朝の光がかすかに差し込む、大きな寝台のある部屋へ切り替わる。この部屋で主人公は朝を迎えるが、寝台の船は馴れた部屋の棧橋になく、隣にはミサコと名乗るひとりの男娼。

主人公は夜の街で酒を飲み、街角で和服の女性に呼び止められ、彼女の部屋に連れられていた。しばらく彼女のからだは男性であることに気づけなかったが、彼女の「艶やかすぎる身のこなし」、「こまやかすぎる心づかい」に疑念を抱く。

“艶やかすぎる身のこなし”と“こまやかすぎる心づかい”で男性と気づかせるところは吉行の隠れた女性観を見出せなくもないが、いまは「寝台の船」の話である。主人公は喉仏を見て、彼女に男であることを確認する。

それでも、主人公は自らが不能であることをなげく。男娼のミサコも、主人公が不能であることにいらだつ。主人公は男娼のやさしさに応えられないことに、男娼は“女性として”の魅力がないことに苦悩する。当初、主人公は好奇心で男娼に接していたが、男娼が自らの象徴を捨ててしまいたいといったとき、彼は男娼の中に女を感じ、男娼も彼に“処

女”を捧げたひとの面影を見出し、互いにやさしさを注いでいく。

しかし、最後までふたりは通わない。

主人公は夢想する。

「私は、その香水瓶を買っていこう。彼女の笑顔を見て、私の心はやさしさに満ちるだろう。あるいは、その時、彼女を女と見做そうと試みることになるかもしれない。彼女は、その?を私に押し当ててくることになるだろう。しかし、依然として、私はそれに応えることはできないだろう。それにもかかわらず、彼女は女になってゆき、私たちの密着した?の間で、彼女の性器だけ、充実し、逞しく変化してゆくだろう。その時、私に苛立たしい気持が起こるかもしれない。私は腕をのぼし、香水の瓶を掴み、むなしく聳え立った彼女の男根に、瓶の中の液体を降りそそぐことになるかもしれない。いつまでも、私は降りそそぐだろう。彼女が女になり切った徴しであるその力に満ちた男根が、匂い高い靄につつま隠されるまで、降りそそぐだろう」

(吉行淳之介「寝台の船」から引用、要約)

美しく、かなしく、愛に満ちた文章である。

男娼が女性らしくなればなるほど自らの性器は逞しくなっていくペース、本質を主人公は受け入れる。

都会的に洗練され、男女の関係の深淵を描いたといわれる吉行の一異形へのやさしさとあこがれ—に自分は惹かれるが、「寝台の船」より4ヶ月後に発表された「鳥獣虫魚」では、より直接的に異形へやさしさを注ぐ。

出版社に勤める主人公。彼には街の風景が石膏色に見えた。人は鳥や獣や虫や魚に見えたが、すぐに彼の目のなかで歪み、よくわからないかたちになっていく。

そんな日々のなか、彼は街でひとりの女性とぶつかり、おどろく。よう子と名乗る似顔絵描きの彼女は確かに人間の形をし、鮮やかな色彩をまとっていたから。

ふたりは会うようになり、やがて、口づけまで進む。ただ、どうしても交われない。彼女が拒絶する。

しかし、不意に彼女は抱いてほしい、といい、彼は下着に手をかける。

それでも、彼女はからだをすくめ、拒絶する。少しずつ彼女の肌が見えたとき、彼は彼女のからだに歪んでいるのを認め、後悔する。彼女のからだは人間でなくなり、石膏色のかたまりになったと考えたから。

ここで彼は真実を知る。彼女のからだに歪みだしたのでなく、最初から歪んでいたことを。彼女は病を患い、背中の骨を何本か取っていた。

いやになった、と彼女はきく。彼は安心した、といい、彼女の傷跡に唇をあてる。

(吉行淳之介「鳥獣虫魚」から引用、要約)

恋をして、主人公の心は石膏色から鮮やかな色彩に変わっていく。彼は彼女の異形、すなわちコンプレックスに愛おしさを見出していく。

物語の最後の場面、彼は彼女を抱きしめる。

彼女は、彼の腕の中で身をうごかす。そのとき、彼女のからだからふしぎな音が鳴った。胸の骨を数本取っていたため、彼女のからだは急に動かすと肺から音になるという。

いとしい気持ちでいっぱいになり、彼は傷跡へ口づけする。傷跡のもっと奥にある、もうひとつの傷にも届くように。

彼は彼女の肺の音が高らかに鳴り響くことを夢想する。勝利のラッパのように鳴り響くことを。

(吉行淳之介「鳥獣虫魚」から引用、要約)

「寝台の船」、「鳥獣虫魚」を読むまで、自分は吉行淳之介がこんなにも情熱的で、みずみずしい恋愛を描くひとと思わなかった。

日本文学史上、吉行淳之介をはじめ、第三の新人と呼ばれる作家は戦争のなかで青春を生き、激動する価値観のなか、自らの価値観を見出さなければ自分を見失ったかもしれない。社会を変えられる機会が若者の特権であるのに、彼らは社会に変えられ、社会に合わせざるを得なかった。

吉行は“性”や“男と女”を描いた作家として知られるが、彼もまた、激動する価値観を生き、見出したものを終生大切にした。

性を主題に男女の関係を描く達人と思えない青春時代の恋愛のような感覚で「寝台の船」、「鳥獣虫魚」を書いた吉行淳之介。第三の新人では遠藤周作は神を、阿川弘之は戦争を青春時代に得たものとして終生主題にしたが、吉行はより始原的な、思春期そのものを描いたように思えてならない。そして、思春期を求め続けたのではないだろうか。だからこそ、吉行は手の届く現実を愛し、コンプレックスにそのひとりらしさを感じていたようにおもう。

変わりゆく時代の中で、自分をつなぎとめるものは社会でも国でもなく、手の届く距離のものであったはずである。

吉行淳之介は終生、巨大な作品を描かなかった。それをもって、彼は小説家らしい小説家であったといえなくはないだろうか。

「鳥獣虫魚」はこう締めくくられる。

「私たちの旅は、いま、はじまったばかりのところなのだ」

詩とは作者が懸命に生きたときにかく脂汗、と吉行はいう。

「寝台の船」、「鳥獣虫魚」もまた、吉行の懸命に生きた証であろう。

自分には、このふたつの小説は、吉行淳之介から愛しい人へのラブレターのようにおもえる。ふたつの作品を読む度、この頃の吉行淳之介は人生最良の恋をしていたのではないかと想像せずにはいられない。

異形＝コンプレックスに生きた証を見出したひとである。

吉行が鬼籍に入り18年経つ。